鈴

若草色の胡瓜の面に　足を浸しながら
鈴虫は　リーンリーンと啼き続ける
恍惚の響きが
虫籠の中に捕えられている
夕昏が砂の園のように
どっぷりと　闇の訪れを運んで来る
狭い闇の夜を
鈴虫の啼き声が
遠景の燈火に変えている

寂寞の兵士達の旅立ちの日に
掌から掌に架かる
小さな鈴のスローモーションの音
一雫のレモンのように拡がり
銀色の寂寞の雨のように
身体中を愛しく沁み渡る
鈴の音の残響の予感が
兵士達の
鈴虫の死体や
小さな鈴の音の期待を
白い肩先に負わせる
騒然とする朝の駅は
柔い腕をレールにしようとする
純朴な兵士達の
愛しい幻影の音の揺らぎ
からりん　からりんと
濁る重い空気
駱駝の毛織の闇の天幕

……小出愛子

明日の朝が明けるまで
からりん　からりん
砂漠の恐怖の銀色のメロディー
鈍い駱駝を連ねて
からりん　からりん
砂漠の海の漁火の哀れ

紅海を泳ぐファイテングラスになって
明日の濁った朝の
鈴鳴る道の天幕を
開ければ良い
額に掛かる空は
去りゆく時の
心の影を留める
世から消えてはならないことを
ファイテングラスの紅の血潮の
寂しさの渦から消えてはならないことを
騒然とする朝の駅の
柔い腕のレールに留める
鈴虫の羽音を
もう一度　聞こうとすれば良い
過去を愛さないものは
未来からも愛されない
死だけは　清清しいものでありたい

からりん　からりん
鈴の音が遠のいてゆく
しーんとした
化石的な瞬間
からりん　からりん
鈴の音が啼いている
君と私の願いは
永遠のように泣いている
からりん　からりんと……